

---

# 女神

勝目博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女神

### 【Zコード】

N3078D

### 【作者名】

勝田博

### 【あらすじ】

気分良く起きた亮一は、何かの予感を感じた。それが、どんな予感さえ理解できずに、行動を起こした。

珍しく、亮一の寝起きは爽快だった。窓から射す朝日は、カーテンの隙間をぬつて亮一の顔を容赦なく照らした。一瞬、眩しいとは思つたが、冬の日差しは意外に優しかつた。目を擦り、目覚まし時計のアラームを止めたが、設定した時間よりも20分は早かつた。不思議と眠気はない。いつもならば、何度もアラームを止めて、ようやく起き出す亮一だが、得した気分に心が弾んだ。その時、何かの予感を感じたのだ。それが何かは、分からぬ。出会いなのか、吉報なのか、はたまた宝くじでも当たるのか、良い予感なのかさえ分からなかつた。しかし亮一は思った。こんなに良い気分は初めてだ。きつといいことが待つてゐるぞ、と。今日は日曜。亮一にとつても、週に一度の休日だつた。一週間働いたんだ、美味しい物でも食べに行くか。週に一度の休日でも、ほとんど家で「口口口口過ごす」亮一は、予感のこともあり、出かけることを決めていた。家にいては、何も起きない。そう思つたのだ。シャワーを浴びて、トーストだけの簡単な朝食をとり、お気に入りのコートを羽織つて亮一は家を出た。12月も半ばを過ぎ、寒さも本格的になつて来る頃だが、今日は春とも言える暖かさだつた。亮一のアパートは住宅地に建つている。小さなアパートだが、静かで最寄の駅も近かつた。ゆっくり歩いても10分程度。その間亮一は、家々に飾られた、イルミネーションに見とれていた。もうすぐ、クリスマス。しかし、亮一には一緒に祝う彼女もない。家族も遠く離れた地で暮している。この三年、寂しいクリスマスを過ごしてきたのだ。高校を出た後、亮一は今のが会社に就職した。大学に行く学力は十分にあつたが、亮一の家庭は母子家庭。経済的に苦しい母に、大学に行きたいとは、言えなかつたのだ。しかも、亮一には2人の弟も居たのだ。生活の苦しさを、少しでもやわらげたいと、亮一は遠く離れた会社に就職を決めた。母は、そんな亮一の手をとり、「めんねと、一粒の涙を流して送り

出した。毎月仕送りしながらも、亮一は趣味のレコードを、買い続けた。CDではない、レコード盤のジャズ音楽。確かに、CDの音は良いと認めてはいたが、時代の風が感じられずに、レコードの音に魅了されていた。月に一枚。亮一は決して無理はしなかった。少しでも余裕があれば、仕送りとは別に送っていた。今月分はまだ購入していない。そこで亮一は、行きつけのレコード店へと行き先を決めた。電車で7駅。渋谷の街は、若者で賑わっていた。日曜のせいもあって、家族連れも多く、一人歩きの亮一は、かすかに恥ずかしさを感じた。若者のほとんどがアベックか、グループなのだ。亮一はもてない訳では決してなかつたが、入社と同時に同級生の彼女と別れたのだ。

今会社には若い女子社員はいない上、残業も多く出会いがなかつた。上の弟も学校を卒業した今、あらためて寂しさを感じていた。道玄坂を登つていいくと、右に曲がる横道がある。その道を曲がって15mほど行くと、小さなレコード店があるのだ。長細い店内は、お客様が三人でいっぱいになる。それでも、天井まで飾られたレコードは、マニアの喉を鳴らしていたのだ。

「おう、また来たね、いらっしゃい」50は越えていると見える店長は、毎月欠かさずにやつてくる亮一を、しつかりと覚えていた。「今日は、何をさがしてるの？」

「まだ決めてないです。いいのがあればと思って・・・」そう言いながらも、亮一の心は予感に動かされていた。もしかしたら、秘蔵のアルバムが手に入るかも。そう思っていたのだ。

「うーん、珍しいものは手に入ったのだが、状態がわるいのさ。君は結構うるさいからね」亮一の音へのこだわりも、この店長は把握していた。

「君好みの一品はないな。来週来てごらん。年末の最終入札でいいのが入るかもよ」

「ありがとうございます。じゃあ、来週来ます」亮一がこの店を気に入った理由の一つがこの店長の人柄だった。無理に売りつけよう

とはしないのだ。いいものがない時は、はつきりと言つてくれて、お客様の好みを理解していたからだ。どうやら、レコードに関する予感ではないようだ。亮一は困った。ほかに当てがなかつたのだ。かと言つて、このまま家に帰つてしまつたら、折角の予感が台無しになつてしまいそうに思えた。仕方なく、ちょっと早めの昼食をとることにした。しかし、いつもと同じラーメン屋では、予感とは無縁に思え、少しはお洒落な店に入ることにした。ところが亮一はこの街を知らない。レコード店と、道すがらの店しか知らないのだ。それこそ有名なセンター街さえ、行つたことがない。天氣もいいし、予感もある。亮一は渋谷の街の探検に出かけることにした。亮一は駅前へと戻つた。そして、忠犬ハチ公の前で全ての方向に目を向けた。どちらに行けばいいのか、必ず予感がすると思ったのだ。今降りてきた道玄坂、有名デパートの本店通り、センター街に代々木方面。ところが、どちらに向いても何も感じない。何も心に響かないのだ。おかしいな、と思いつながら、ぐるっと振り向いたその瞬間、亮一の胸に衝撃が走つた。線路を越えた富益坂方向に、何かが待つていると思えたのだ。まるで、手招きで呼ばれたようだつた。線路を越えると、並木通りが空にも続くようになつていて。予感は確かにこつちからだつた。はじめてみる風景に、心弾ませ亮一は坂を上り始めた。ふと見ると少し先に小さなイタリアンレストランの看板が見えた。わき道を2つ越えた角だつた。よしあそこに入ろう。そう決めて、歩く速度を速めた。亮一はレストランで、素敵な人とめぐり合う予感を感じていた。いや、そう思い込んだのだ。ところが、1つ目のわき道を越えたとき、心浮き立つ予感がぶつりと途切れたのだ。途切れた音が聞こえたと思うほどはつきりと感じたのだ。あれつと思ひながら2・3歩戻つたときに、またも予感が踊りだした。はつきりと心の中で踊りだしたのだ。そこは丁度わき道の真ん中だつた。そうか、予感はこつちからか、と亮一はわき道に折れた。ところが、レストランはあるか、店舗もないのだ。どうやら住宅地のようだが、小さな家と数軒と駐車場しかなかつた。それでもしば

らく歩いていくと、住宅の一階を店舗にしたレストランがあつた。

亮一は迷わずその店に足を踏み入れた。店内には4つのテーブルが置かれていたが、お客は誰もいなかつた。時間は既に12時を回つている。一番混む時間帯のはずだが、誰もいないので。ちょっと離れているからな。亮一はそう思い席に着いた。驚いたことに店内の壁には、数々の名盤ジャズレコードが飾られていたのだ。しかも、そのどれもが新品と言つてもいいほどの保存状態だつた。50年代から60年代のレコードには、カバーすらかけていない。どうやつて保存したのか、見当も付かなかつた。

「いらっしゃいませ」亮一が壁を驚きの眼で見るうちに、いつの間にか隣に女性が立つていた。亮一は慌てて頭を下げた。そして、その顔を見た時、2度目の衝撃が亮一の胸を貫いた。歳は亮一と同じくらい。目は一重で大きく、鼻筋もしつかりとおり、小ぶりの口は柔らかそうな厚みを持つていた。まつたくの好みなのだ。亮一の思い描く理想の女性だつたのだ。予感はこの事だと、亮一は確信を持った。

「何にしますか？」亮一から見たら女神とも思える女性は、小さなメニューを差し出した。出された水を飲み干し、亮一はメニューを受け取つた。

「お決まりになつたら呼んで下さい」女神は亮一の席から離れていつた。亮一はメニューを見る振りをしながら、女神の行動を眺めていた。この家の娘だろうか。一生懸命にスプーンやホーキを磨いている姿は、亮一の心を確実に溶かし始めていた。亮一の視線に気がついたのか、女神は僅かに笑みを浮かべて、亮一の席に向かつてきだ。

「お決まりですか？」亮一は慌ててメニューを、指差した。

「ハヤシライスですね」咄嗟に指を差したはいいが、亮一はハヤシライスがどんなものなのか判らなかつた。しかし、そんなことはどうでもよかつた。

「はい」小声で返事をしたが、亮一の興味は女神だけに向けられて

いた。味なんかわからない。とにかくゆっくり、女神を見ながら亮一は綺麗に平らげた。しかし、言葉をかける勇気を亮一は持ち合わせていなかつた。翌週、亮一はレコード店には向かわずに、まつすぐと女神のいる店へと向かつた。やはりほかにお客はいない。知り合いになるチャンスでも、結局は亮一は話しかけられなかつた。それから、毎週その店に通うようになつたのだ。年も明け、2月も終わりになる頃、やつと亮一は話しかけた。

「す、すゞ」コレクションですねえ」亮一は壁のレコードを指差し尋ねた。

「亡くなつた、父のものです」女神は優しく答えた。

すいません、夢なじみ悪いです。

「いいのですな、せうせうの話ですから」「女神の髪を書かせる仕草に、亮一は我を忘れそうになつた。

「でも・・・」女神が言葉を閉ざした。

「でも、なんですか」亮一は焦った。一瞬嫌われたのではないかと

「やつと、話かけてくれましたね」

「え?」亮は自分の耳を疑った。

てゐるのかなつて

「どんでもないです。恥ずかしくて……」亮の顔は真赤になっ

使いが目に見えるような近さだ。亮一は慌てて首を振った。

本業です。好きです」亮二は、おじいと自分の想いを伝え

ていつた。女神は冬と名乗つた。冬に生まれたのが理由らしい。父

はいない。母と一人で切り盛りしているそうだ。しかし、不思議と母の姿を見たことはなかつた。キッチンにいるとしても、いつも無人の店ならば、一度くらいは見かけても、良さそうに思った。とこ

ろが、声さえ聞いたことがなかつたのだ。反面、冬との時間を邪魔されずに済んでいたのも事実だつた。

## 記憶（前書き）

亮一は不可思議な世界に、紛れ込む  
そこで亮一が見たものは・・。

その朝亮一は、寒さから目を覚ました。そろそろ3月、春の太陽が差し込む時期だ。ところが、カーテンを開けた亮一の目に飛び込んだのは、一面の銀世界だった。冬の最後のあがきだろうか、見渡す限り雪化粧が施されていた。昨夜のニュースでは、雪のゆの字も言つてはいけない。亮一は、軽く身震いを起こした。食卓兼のコタツは、つい最近片付けたばかりだった。ストーブの灯油はわずかに残っている。去年の残りだ。北国育ちの亮一には、東京は異常に暑く感じ、ストーブはずつと使っていなかつた。そんな亮一が寒く思ったのだ。表はかなり冷え込んでいるように思えた。それでもストーブに灯がともると、幾らか寒さは和らいだ。そそくさと出勤準備を整えて、亮一は表に飛び出した。ところが、外はおだやかに晴れ、どこにも雪は積もつてもいなかつた。

「えーなんだ」つい言葉が口から漏れた。振り返った部屋の中では、消したばかりのストーブが、まだチンチンと音を立てていた。窓側に回り込んで見たが、そこにも雪はなく、穏やかな朝の日差しがあたりを照らしていた。キッネに化かされたようだつた。窓からの景色はなんだつたのだろう。亮一はもう一度部屋に駆け込み、カーテンを開いた。やはりそこにも雪はなかつた。夢でも見たのだろうか。それにしては、ストーブもつけ、寒さに震えた感覚は事実だつた。しかし、悠長に考えている暇はない。出勤時間は当に過ぎていた。いつもより、乗った電車は一本遅い。だが、一本ならば、駅から走れば十分に間に合う時間だつた。会社の最寄の駅までは、30分ほどで着くが、その電車は異様に空いていた。何度かこの時間の電車にも乗つた事があつたが、こんなことは初めてだつた。一瞬、祭日ではと思ったが、週の真ん中祭日でもなかつた。席は十分空いている。亮一はゆつたりと腰をおろした。暖房のせいでお尻が温かい。亮一はいつの間にか眠つてしまつた。目覚めたときには、電車

は見たこともないところを走っていた。腕時計に目をやると、始業時間はとうに過ぎ、そろそろ、午前の休憩だった。亮一は慌てて携帯を取り出した。乗客はほとんどいない。同じ車両には、年老いたおばあさんと、学校をぼりらしに学生だけだった。

ところが、アンテナ表示は出ているものの、いつこいつに電話はつながらなかつた。まるで携帯の会社が消滅したように、何の反応もないのだ。早く降りなくてはと立ち上がった亮一を、更なる驚きが襲つた。電車は三両なのだ。亮一の乗る車両の前後に、一両ずつしか連結されてないのだ。亮一の頭は完全に混乱していた。通勤電車で三両編成など、見たこともないのだ。更によく見てみると、明らかに古いのだ。車両は新しいが、形が古いのだ。まるで故郷のローカル線のよう見えたのだ。しかも、車窓の外を流れる景色は、故郷そのものだった。見慣れた山並みは亮一の記憶にも、しつかりと残っている。ただ、時折見える家々は、今の作りとは明らかに違つていた。サツシもなれば窓もないのだ。見えるのは、木製雨戸と障子紙だった。亮一は思い切り目を擦つた。夢ではないかと思ったのだ。しかし電車はゆっくりと駅のホームに停車した。見慣れたホーム。見慣れた改札。まぎれもなく亮一の故郷の駅だつた。ただ、記憶に残る記念樹はない。駅の開設50周年記念に植えられた木だ。亮一の頭は混乱の極みに達した。

## 光の住人（前書き）

覚醒した亮二

不思議なお店の少女。

初のデートはどうなるのか・・。

「大丈夫ですか」亮一は混乱したまま座り込んでいた。そこに声をかけたのが、電車で一緒の学生だつた。亮一が気分でも悪くしたのかと、声をかけたのだ。

「ありがとう、なんでもないよ」そう言つて顔を上げた亮一は、少年の顔に見覚えがあると思つた。

「うん？君、学校は？」何故そんな質問をしたのか、亮一には分からなかつたが、聞かずにはいられなかつた。心の中で、何かがそう言わせた様にも感じた。

「早退です。まだ2時間目だつたけど・・・。身体が弱いのですね。僕の名前は・・・」最後まで聞く必要はなかつた。少年のはにかむ笑顔に、亮一の古い記憶が蘇つたのだ。亮一が中学入学間もない頃に、病気で死んだ亮一の父。その父が見せてくれた自分の学生時代の写真。その笑顔が今、目の前にあつたのだ。しかも名乗つた名前も、父の名前に相違なかつた。死の間際、亮一の父はこう言った。

「私は身体が弱かつた。でも、お前たちは元気だ。それが一番嬉しい。身体をいたわれ」

亮一は若かりし父の顔を見ながら、意識が遠のく自分に気が付いた。目の前のもやが徐々に視界を奪つていつた。

「・・・か。大丈夫か」ふと目を開けると、いつもの課長の顔が見えた。

「えつ」亮一は何度も瞬きを繰り返した。

「まったく。えつ、じゃないよ」課長は亮一を抱き起こした。

「急に倒れるから、ビックリしたよ。本当に、大丈夫か」心から心配しているのが、亮一にも伝わつた。

「はい、大丈夫です」亮一は身体の手や胸を撫ぜ回したが、これといった異変は見つからなかつた。そこはいつもの倉庫。毎日亮一が

働く場所だ。食料品の卸問屋で、仕入れた商品を箱詰めにして送る倉庫。誰でも最初はこの倉庫からだ、と聞かされた亮一の仕事場だった。時計を見上げると、10時10分前。しかし亮一には、出勤した記憶も、仕事を始めた記憶もなかつた。電車を乗り越し、懐かしい故郷にいるはずだった。亮一は頭をかきながら、課長に尋ねた。

「僕、今日ちゃんと来ましたか」課長は目を丸くした。

「何、言つてんだ。しょうがないな。こつちこい」課長は倉庫の隅に亮一を連れて行つた。

「君は、まじめだし、心配だから言つけどな。この頃顔色悪いぞ。心配事でもあるのか」怒ると怖い課長だが、部下の事は人一倍考えていた。もちろん亮一がまじめだからこそだ。

「何も、心配はありません。大丈夫です」

「そうか、それならいいが・・・まあ、今日は帰りなさい。倒れた上に顔色もよくないようだし、出来たら医者にかかるたほうがいいだろう」確かに、普通でないことは亮一も理解していた。頭はボーッとしたままだ。亮一は言葉に甘えて帰ることにした。タイムカードの出勤時間は、いつもと変わりはしなかつた。全ては夢なのか。夢としたなら、意識のないまま出勤したことになる。眠つた状態だ。それも、考えられなかつた。ところが、帰宅中に電車の中で聞いた話は、亮一の疑問をさらに大きくした。

「今朝の雪、ビックリね」

「降るなんて言つてなかつたのに」高校生だろうか。2人の女子学生が話していた。やっぱり、今朝の雪は本物だつた。寒さを感じ、カーテンから見た景色が、現実だつたのだ。亮一はそこまでは起きていたと確信できたが、いつ現実から引き離されたのかが、解らなかつた。アパートの扉を開けるまでの短時間に意識を失つたのは、確からしい。どんなに思い出そうと記憶をたどつたが、その答えは見つからなかつた。亮一は無性に冬に会いたくなつた。日曜以外に会うのは初めてだ。冬はきっと驚くに違ひない。亮一はそう思つた。反面、忙しくて話も出来なければどうしようと、言つ気持ちもあつ

た。ウイークデーは込み合つてゐるかも知れないのだ。家に寄らずに真つ直ぐ行けば、丁度、ランチタイムのはずだつた。亮一は冬のことを考えながらも、不思議な店にも興味を持つていた。第一にあのレコードだ。無造作に飾られているにしては、すべて、保存状態は良い。そしてメニュー。2度目に訪れたとき、じつくりと見たのだが、メニュー全体が古めかしく思えた。紙が古いというわけではない。商品としてのメニューが古いのだ。ハヤシライスに、ライスカレー。今はどこでも、カレーライスだと思つていた。そして、ビフテキ。初めは意味が解らなかつた。冬の説明で、初めてビーフステーキだと解つたのだ。極めつけはオレンジジュース。昔、幼い頃には飲んだ記憶もあつたが、今では出回つていらない商品だつた。一度、レコードをかけてもらつた事があつた。亮一が余りに熱心に聴くため、冬がかけてくれたのだ。夜にはよくかけるらしいが、昼はかけないそうだ。そのアンプに亮一は驚いた。真空管のアンプだつた。電源を入れると、僅かに電流の流れる音が聞こえる。ジーっと音う音は、それまでもが音楽の一部になつてゐた。一步でも店に入ると、そこが21世紀とはとても思えなかつたのだ。しかし、元々古いジャズの好きな亮一には、その雰囲気が心地よく、いつも長い時間冬の店にいたのだ。渋谷に近づく頃には、頭のもやもやもすつきりと晴れ、亮一は気分爽快な足どりで、通いなれた坂を上り始めた。羽のように身体が軽い。亮一は思つた。冬は本当の女神だと、自分を救う女神だと感じていた。その証拠に、店に近づくにつれ、心も軽くなつてきたのだ。一刻も早く店に行きたい。一秒でも早く冬に会いたい。亮一は足を速めた。坂にはランチタイムに繰り出した、サラリーマンや〇〇でいっぱいだつた。「混んでるかな」一抹の不安をよそに、亮一は人々をすり抜け、店へと駆け出した。ところが店は閉まつていた。定休日の看板も何も表示はされていない。目の前には、心の落ち着く樂園があるにも関わらず、無情なシャッターが下ろされていたのだ。亮一は思わずシャッターを叩いた。

「冬さん、冬さん、おやすみですか」何度も叩くうちに、2階の窓

から冬が顔を覗かせた。

「亮一さん、どうしたの、こんな日に・・・」冬の顔は、困惑した表情だった。冬は振り向き、誰かと話していた。母親だろうか。考える間もなく、冬に笑顔が戻り亮一に話しかけた。

「今行くわ、待つて」下から見上げる冬も素晴らしかった。ネグリジェとでも言うのだろうか、見かけない室内着を着ていたが、普段では判らない身体の線が、日の光で透けて見えた。冬はスタイルも抜群だったのだ。冬は裏から出たのだろう、家の脇から姿を現した。

「どうしたの、今日は木曜よ。仕事は「亮一」は、会社で倒れ、早退したと冬に伝えた。その時冬は、一瞬悲しそうな目をしたが、すぐに笑顔を取り戻した。

「今日は、おやすみな。『めんなさい』。母の調子が悪くて『いえ、謝ることはないですよ。急に来たのは僕ですから』「亮一」は慌てて答えた。

「でもね、今聞いたら、気分もいいから出かけて来なさいって。もちろん、亮一さんがよければの・・・」

「もちろんです」亮一の心ははつきりと躍りだした。やはり、振り向き話していたのは、母親だった。

「じゃあ、用意してくる。待つて」冬はそう言つて家へと戻つていった。初めに感じた予感は当たつていたのだ。亮一に素晴らしい出会いを教えてくれていたのだ。亮一はその予感に、素直に従つた自分を褒めた。さらに「よくやつた」と声に出して褒めたのだ。しばらくして現れた冬は、それこそ雪のように真っ白だった。腰の辺りからふわっと広がったワンピース。少し短めのコート。そのコートは、スカートの広がりを邪魔しない丁度よい長さだった。そして真っ白なローヒールには、甲の所に小さなリボン。ストラップのない手持ちのバッグ。その全てが真っ白だった。日はまだ高い。その太陽の光が、冬の全てを光輝かせていた。普段の冬でも眩しいのに、今冬は、光の住人のようだった。

「行きましょ」冬は躊躇することなく、亮一の腕に手を絡ませた。  
「う、うん」亮一の心臓ははるか遠くまで聞こえそうなほど、激しく鼓動を打ち鳴らした。冬に聞こえはしないかと心配だったが、冬は平然と亮一の腕に絡み付いていた。

「食事は、食べたの」亮一は冬に尋ねた。

「ううん、まだよ。そうね、ご飯たべましょ」冬の眼は輝いて見えた。実際、輝いていたのだ。日の光を反射して、キラキラと輝いていたのだ。まるで穏やかな水面に太陽が照り返すようになっていた。「そうだ、いいところがあるの、そこに行きましょ」亮一の返事も聞かずに、冬は腕を引っ張った。もちろん反対などする気もなかつたが、積極的な一面に、正直なところ亮一は驚いた。だが、不快感は微塵もない。冬に対して不快感など起きるはずもなかつた。道行く人は、誰もが冬を振り返った。男も女も、皆が冬に見とれていたのだ。亮一は照れくさい気もあつたが、冬といられる自分を誇りにさえ思い始めていた。冬は人の目などは氣にも留めない。亮一に話しかけては笑い、自分が話しては笑っていた。その笑顔が、人を惹きつけているのだろう……。

## 記念日（前書き）

テー  
トで向かっ  
た先々で、亮一を驚かす数々の出来事。それは・・・

冬が亮一を連れて行つたのは、センター街の中ほどにある、お好み焼き屋だった。小さい店だがおいしいのだろう。店内は込み合っていた。しかし運がいい。丁度、席が1つ空いたところだった。店員はしばらく冬の姿に釘付けだった。その眼は、妖精にでも出会ったように、幸せさえ溢れているようだった。

「あっ、すいません。今片付けます」我を取り戻した店員は、空いたテーブルを丹念に磨き上げ、一人を案内してくれた。その間、店内はシーンと静まり返り、冬の姿を見つめ続けていた。店内はもちろんのこと、センター街でも同じだった。通りすがりの人間が、全て冬に注目するのだ。携帯でおしゃべりの最中だった学生まで、話を止めて見ていたのだ。騒がしい通りも、一瞬の静寂に包まれ、普段は聞けない鳥のさえずりさえ聞こえたのだ。ところが冬はお構いなし。他人事のように亮一に話し、屈託もなく笑っていた。ここまで来ると、亮一の優越感も影を潜めた。それほどまでに皆の目には、崇拜の心までもが映し出されていたのだ。席に着くと、店内も喧騒に包まれ始めた。亮一は思い切つて冬に尋ねた。

「どう言う事なの。冬は芸能人」的外れな質問に、冬は声を出して笑い始めた。

「まさかでしょ。芸能人が、ウェイトレスをするかしら」そう言わればもつともだつた。しかし皆の視線がどうしても気になつた。

「じゃあ、何でみんなは、冬さんを見るの」

「私に聞かれても・・・、誰かと勘違い?きっとそうよ。ね。選んで。ここ美味しいのよ」その笑顔に亮一は何も言えなかつた。ただ、冬に似た芸能人などいない。それだけははつきりとしていた。冬の言つよひに、お好み焼きは美味しかつた。冬が作つてくれたから余計にそう感じた。お好み焼きをじつと見据えて、下唇を軽く噛みながら、一つのへらでひっくり返す。その表情がとにかく可愛かつた

のだ。東京に就職して丸三年、若い亮一が始めて掴んだ幸せの時間だつた。二人はあつといつ間に4つも平らげた。驚いたことに、料金はタダになつたのだ。伝票を渡して財布を出すと、店員が大きな声で叫びだした。

「おめでとうございます。キャンペーンのB賞当たりです」亮一には何のことかわからなかつた。すると店員が出てきたレシートを見せ、壁の張り紙を指差した。張り紙には、A賞、食事券5000円、B賞

お食事無料、C賞・・・と続いていた。そして、差し出されたレシートには、赤いインクでB賞と印刷されていたのだ。亮一は財布をポケットにしまい、照れくさそうに店を出た。

「ありがとうございました。ぜひまたご一緒にお越しください」店員の声は外にも聞こえた。ところが冬は外にはいなかつた。辺りを見回すと、向かいの雑貨店を冬は覗いていた。冬に向かって歩き出したとき、一人の老婆が一生懸命に拝む姿が眼に入った。

「ありがたや、ありがたや」老婆は冬に向かって拝んでいたのだ。亮一は変人でも見るよう老婆をながめた。しかし老婆の衣装は派手ではないが、きつとしたもので、きれいな指輪もしていたのだ。とても変人には見えなかつた。亮一は首を傾げながら、冬に近づいた。

「ねえ、聞いて今の店・・・」

「タダだつた」

「えつ、何で知つてゐる」亮一は驚いた。冬は伝票を渡す前には、店を出ていたのだ。

「だつて、あんなに大きな声ですもの、外にいても聞こえたわ」屈託のない笑顔で冬は答えた。冬の言つことは、亮一にも素直に納得できた。

「ねえ、あれ可愛い」冬が指を差したのは、小さな繭玉人形だつた。雪ん子のように笠をかぶり、小さな藁の靴を履いていた。雑貨店とは言え、珍しいものだと亮一も思つた。田舎に行けば、繭玉で出来

た起き上がりこぼしなどの人形も売っているが、東京の真ん中では、そう見るものではなかつた。

「買つてあげるよ。ちょっとまつてて」亮一は店に入つていつた。値段は見えなかつたが、高くはないだろう。少々高くとも、冬が気に入つたものならば、買つてあげたかったのだ。今日と言つ日の記念としても。ところが、この店でも幸運が待ち受けていた。店舗の入り口でもらつた券が、500円の当たり券だつたのだ。繭玉人形も500円。これには亮一も驚いた。無料で食べた食事に、500円の金券。買いたいものも500円。出来すぎていた。これも予感の1つなのかと思ったが、冬以上の幸運はなかつた。

「はい」亮一は小さな箱を冬に渡した。

「ありがとう。今日の記念ね」亮一の気持ちと、まるで同じだつた。その時、亮一にも、老婆の祈りの意味するところが判りかけてきた。冬は本当に女神かも知れないと・・・。

## 人の情（前書き）

思いがけない亮二の秘密。触れば人情。

## 人の情

日も暮れかけたときに、一人は冬の店に戻った。

「今日は、ありがとう。とっても楽しかったわ」夕日を浴びて真っ白な冬が朱に染まった。

「ううん。僕のほうこそ楽しかった。またどこかに行きたいな」亮一の答えに、冬はうつむいた。

「そうね・・・、行けたらね」

「えっ」亮一は冬の、言おうとする意味が判らなかつた。

「ううん、何でもないの。また来てくれる?」満面の笑みを浮かべて、冬が尋ねた。

「もちろん。絶対に来るよ」亮一はさつきの言葉は忘れていた。満面の笑顔にかき消されたのだ。

「待ってるね」冬は、亮一におやすみのキスを頬にした。一瞬、我を失つた亮一だが、家に向かう冬を引き寄せ、亮一は唇を重ねた。冬も亮一のキスに答えてくれた。夢中だつた。亮一の気持ちは、完全に冬に支配されていた。これは亮一が望んだことでもあり、誰に恥じることのない感情だつた。夕日が一人を暖かく包み込んだ。長い、時間を忘れるほどに長い時間キスを交わした一人は、名残惜しそうに分かれた。亮一は冬の姿が見えなくなつても、しばらくそこにたたずんでいた。見上げた窓に電気が灯つた。既にあたりは真っ暗だつた。亮一の心は躍つっていた。実際に身体も踊つっていたのだ。踊りながら坂を下り、亮一は渋谷の駅に着いた。ところが、踊つていた心の鼓動が、急に激しく脈打ちだした。その鼓動はどんどんと早くなり、やがて亮一の胸を締め付け始めた。「苦しい」亮一は、初めて身体の異変に気が付いた。意識はどんどんと身体から離れ、暗い谷間に吸い込まれて行つた。

亮一の意識が戻つたのは、病院のベッドだつた。ベッドを囲んだカーテンと消毒液の匂いが、その事を亮一に教えていた。少しは胸

の痛みは収まつたものの、起き上がるることは出来なかつた。人の足音、となりで咳き込む声、かすかに聞こえる話し声。そのうちの足音が、亮一の所へ近づいた。カーテンが開かれ看護士が顔を覗かせた。亮一に気が付くと、看護士は笑顔を浮かべて話しかけた。

「大丈夫ですか。どこだか分かりますか」優しい笑顔の看護士だ。亮一は言葉を発せられなかつた。口の中はカラカラに乾き、唇が腫れ上がつたように重かつた。

「いいですよ。今、先生呼びますから」看護士は、カーテンを閉めて立ち去つた。しばらくすると、数人の足音が聞こえてきた。カーテンが半分ほど開かれ、先ほどの看護士と、医師と二人の看護士が現れた。先ほどの看護士は、注ぎ口の伸びた急須みたいたいなものに、水を入れて持つてくれた。

「ここが分かりますか」医師が尋ねた。口が潤つたせいで、亮一は話が出来た。

「僕は、倒れたのですね」亮一は理解していた。

「そう、意識を失い、ここに運ばれました」医師はカルテに目を落とし、話を続けた。

「身内に、心臓の悪い人はいますか」その言葉で、亮一は胸の苦しみの意味を知つた。

「おそらく父でしょう。若いときになくなりました」亮一の言葉は落ち着いていた。

「貴方も、心臓に欠陥があります。おそらく手術が必要になるでしょう。ご家族はどちらにいますか」

亮一は医師の質問に答えなかつた。田舎の母を思い出していたのだ。

「僕は、退院できますか」

「ええ、痛みが取れれば大丈夫ですが、早急に手は打つたほうがいいでしょ」医師は明らかに怪訝な表情を浮かべ、亮一に答えた。

「すいません。母には会つて話したいので」

「それが、いいでしょ」亮一の気持ちを察して、医師は快く答えた。

翌朝、看護士から退院の許可を受け取った。今日一日問題がなれば、明日の退院が出来るそうだ。亮一は会社に連絡を入れた。課長はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「とにかく今は、養生に専念してくれ。足りないものはないか。何かあつたら、すぐ連絡しろよ。看護士にも、ここに番号、教えとけよ」ぶつきらぼうに言い放つ課長だが、優しさは十分に亮一に伝わった。

亮一は翌日退院した。沢山の薬を渡され退院したのだ。亮一は母に電話を掛けた。

「えつ、日曜日かい。夜？そりや構わないよ。お前の家を」亮一は電話を切った。病気のことは一言も言わなかつた。亮一が夜を選んだのは、その前に、冬に会つておきたかつたからだ。もし、手術でも受けことになつたら、しばらく会えない。冬には言つておきたかつたのだ。亮一は退院した足で、レコード店に向かつた。レコードも来れなくなるかもと思つたのだ。

「お~久しぶり。何かあつたのか」店長の氣さくな人柄がにじみ出た言葉だつた。

「え~、ち、ちょっと・・・」亮一の異変に店長は氣が付いたが、その事には触れなかつた。

「そうそう、君が来ないから、どうじよつと、思つてたんだ。いいのを、取つておいたよ」年末の話を亮一は思ひ出し、差し出されたレコードを手に取つた。以前からほしかつた一品で、なかなか流通しない名盤だつた。亮一は声に出して喜んだ。

「ありがとうございます。うわ~うれしいな。ずっと探していたんですね。へ~

「1000円でいいよ」店長はあつさつと答えた。

「えつ、1000円？」亮一は思わず聞き返した。どこに行つても数千円以上の値段が付いていたのだ。

「でも、1000円じゃあ・・・」

「あ~い。ほら、ここに傷があるでしょ？ しあうがない。だから

1000円でいいんだ」店長の触ったところには、確かに傷があった。しかし、レコードジャケットの隅に付いた小さな傷で、価値的には何の問題もないはずだった。

「その代り。また、来ること。それが条件だ」店長は方目を瞑つた。亮一は流れ出そうになつた涙を必死にこらえた。1000円を渡し、亮一は店を出よつとした。すると、後ろから店長が話しかけた。

「何があつても、また来ること。忘れるなよ」

「はい」亮一は店から飛び出した。涙が流れるのは分かつたが、そのまま亮一は走り出した。店長には分かつっていた。顔色の悪い亮一を見て、何かの病気だと確信したのだ。彼もまた幼いわが子を、病氣で失つた経験を持つていたのだ。

亮一はアパートのベッドに寝転び、天井を見上げていた。買ったばかりのレコードが、亮一の心にしみ込んでいく。胸の痛さはまつたくない。音楽を聞きながら、亮一の目からは涙が流れた。何度も怒られた課長の優しさ、店員と客との関係を越えた店長の優しさ、思い出すだけで溢れる涙を抑えられなかつた。はたして冬は、亮一の話を聞いてなんと言うだろ。話さないほうがいいのか。亮一は悩んでいた。日曜は、あと数時間で訪れる。

故郷（前書き）

故郷に戻った亮一。だが、彼の横には・・・。

日曜日。着替えと薬を小さなバッグに入れて、亮一は冬の店に向かつた。亮一はまだ悩んでいた。話すべきか話さないべきかを、一晩中考えていたのだ。結局は、冬への答えが出ないまま、時間が来てしまったのだ。遅くなれば、帰省が間に合わなくなる。ところが、店の前には冬が立っていた。店のシャッターは下ろされ、冬はちょっと大きなバッグを下げていた。亮一は冬に駆け寄り冬に尋ねた。しかし冬は黙つてうつむいていた。

「どうしたの、店はおやすみなの？」亮一の質問に、冬は答えず、黙つて亮一と手をつないだ。

「冬さん・・・」亮一が何かを言つ前に、冬は亮一の手を引き歩き出した。お母さんと喧嘩でもしたのかと、亮一は何も言わずに歩き出した。二人はそのまま駅まで歩いた。駅まで来ると、冬がやつと口を開いた。しかしその内容は、亮一の予想を大きく外れた驚きの言葉だった。

「私も一緒に行くわ。切符はどこまで？」冬の顔は必死に笑つていたが、眼には悲しみが見えた。

「行くつて、どこへ」冬の答えは想像できた。しかし、聞かずにはいられなかつた。

「亮一さんの田舎。行くのでしょ？」やはり、答えは想像通りだつた。冬には隠し事は出来ないようだ。

日曜日の昼下がり。下り電車は空いていた。一人は無言で揺られていた。一人の座るボックス席の向かいにはいらない。冬は亮一の肩に頭を乗せて、静かに目を伏せていた。寝ているわけではない。それは亮一のも分かっていた。だが、なぜ冬は亮一の帰省を知つていたのか。もしかしたら、病気も知つていては、と亮一は考えていた。冬には不思議な力がある。老婆が拌み、デートの時にも、一銭のお金も使わなかつた。レコード店の店長も、亮一のことを薄々

感じたくらいだ。冬には全てがお見通しなのかも知れない。しかし、冬が何も言わない以上、亮一も何も言えなかつた。特急電車で3時間。あとは、ローカル線への乗り換えだけだ。ローカル線は途中の駅で3両編成に減らされる。編成作業の待ち時間に、二人は駅のお弁当を買い込んだ。ずっと無言でいたために、昼食を取り損ねていたのだ。

「お弁当。食べる？」  
こののはおいしいよ、亮一のかけた言葉に、冬はコクンと頷いた。空は夕焼けが始まりだしたところで、白と青とオレンジの色が絡み合い、駅のホームを柔らかな光が包んでいた。暖かくもあり、ちょっと冷えた感じもする光だつた。作業も終わり、ローカル電車は動き始めた。亮一と冬、ほかには2人の乗客しかいない。その時亮一は思い出した。この情景、どこかで見たぞと、思つたのだ。あの日、亮一が意識を失い倒れた日だつた。思わず亮一は立ち上がつた。やはり乗つているのは3両編成の真ん中の車両。乗客は老婆と学生。あの情景そのままだつた。冬がとなりにいる以外は……。

「どうしたの」不意に冬が話しかけた。

「いや、何でもないよ」亮一は腰をおろした。よく見ると、顔は違うし服もちがつた。何より電車が新しかつた。だが、夢とも現実とも言えない記憶と、状況はそつくりだつた。駅には早めに着いた。母には夜と伝えておいたが、冬を連れて行くことには、抵抗があつた。どう紹介して分からなかつたのだ。しかも、話が話だけに、冬の存在が大きく左右することにもなりそつた。

「私はホテルに泊まるね」冬は亮一の気持ちを察したのか、いきなりそう言つと、一人で歩いていつた。

「どこ行くの？この街分かるの」亮一の問いかけに、冬は黙つて指を差した。差された指のその先には、この街唯一のビジネスホテルの看板が見えていた。

「わかつた。あとで顔出すよ

「おいしいものを食べさせて」冬はこりと笑つて歩いていつた。

まだ、雪は残つてゐる。ロータリーの周りには、除雪された雪が高々と積み上げられていた。その雪の匂いが、故郷をはつきりと意識させた。

「急にどりした」母は食事の用意の最中だつた。  
「うん……」亮一は言えなかつた。帰つてすぐには切り出せなかつたのだ。

「つまくやつてるのかい。全然帰つてこないで」言葉とは裏腹に、その声には非難の色は伺えなかつた。  
十分亮一の気持ちが分かつてからだ。3年ぶりに見た母は、かなり老けたように見えた。

「もうすぐ」飯できるからね」母は嬉しそうに言つたが、亮一は夕食を断わつた。

「何言つてんだい。その娘さんも連れていらつしゃい」母は妙に嬉しそうだつた。でもその前に、話しておかなければいけないことがあつた。

「かあさん、ちょっとといいかな」

「なんだよ、あらたまつて」母の顔は一瞬一瞬していた。まるで結婚の承諾を待つてゐるようだ。そう思われても仕方がなかつた。いきなり戻つて、しかも女性連れなのだ。ほとんどの親はそう思つだろつ。エプロンで手を拭きながら、母が居間にやつてきた

「さあ、話してごらん。いい娘さんだろうね?」母は完全に勘違いをしていた。

「そうじゃないんだ。母さん。実はね……」その時、玄関のベルがひとしきり鳴らされた。

「誰かね?」母は話の途中で席を立つてしまつた。玄関の引き戸の音が聞こえた。話し声は聞こえない。

「亮一、亮一」来たわよ。娘さんが駆け込んできた母の後ろには、冬が立つていた。

「まあ、まあ、遠いところを。汚いとこだけゆつくつしてね。この子は何にも言わないから……」

母は慌てて茶碗を出し始めた。

「おかあさん、お構いなく。座つてください。私がします」冬は母のとなりに立膝で立ち、急須に茶の葉を入れていた。母の田から大粒の涙がこぼれたのを、亮一ははつきりと見たのだ。

「お母さん、だつて・・・うれしいね。お父さんも喜んだろうね」母は田頭を押さえて泣き出した。亮一は何も言えなくなつた。病気の話は結局なされなかつたのだ。冬は終始母を気遣い、率先して台所に立ち、楽しい食事が進んでいった。ただ、下の弟だけは、冬に見とれて食事に手を出さなかつた。

## 求愛（前書き）

引き込まれる壳の愛。そして一つになる日が・・・。

「送つてくるよ」亮一は母に言った。

「気を付けるんだよ。冬さんまた来てね」母は、冬が気に入つたようだ。何度も、いい娘さんだと言う母に冬も恥ずかしがつていた。冬の動きは素晴らしかつた。何度もこの家に来たように、台所の中を把握していた。母にも聞かずにお皿を出したり、グラスを出したり、忙しそうに動いていた。確かに広い台所ではない。それでも冬の動きに無駄はなかつた。一瞬、亮一は結婚したらこうなのかな、とも考えた。亮一は冬を愛していた。それは、紛れもない事実だ。亮一は冬に告白したが、冬の気持ちは聞いていない。嫌いではないだろう。亮一はそう思つた。でも、はつきりと聞きたい気持ちと同時に、怖さもあつた。一人は並んで歩き出した。

「ビックリしたよ。来るなんて言わないから」

「急にごめんね。おかさんに会つておきたかったの」冬は楽しそうだつた。電車の中での冬とは、比べものにならぬほど、活き活きとしていた。田舎の道には街灯はない。懐中電灯を片手に、烟のあぜ道を歩いていた。遠くに駅の灯りが見えているが、ここでは懐中電灯が頼りだつた。雪が無ければ問題ないが、まだ積もつた雪で道はよく見えなかつた。亮一には無くとも歩ける。しかし、母は冬を心配して渡してくれたのだ。あぜ道の中央だけは踏み固められている。だが、周りは道の端も分からぬ。

「気をつけてね、落ちても烟だから大丈夫だけど」亮一がそう言つと、冬が急に笑い出した。

「ほんとう? 大丈夫?」電灯の明かりを見ながら、冬は尋ねた。

「もちろん、肥ダメはあるけど」亮一がそう言つた矢先、冬が思いつきり亮一を押した。

「うわあ」亮一はバランスを崩し、ゴロゴロと畠に転がつていった。冬はそれを見て大笑いしている。

「ほんとう、大丈夫ね」体半分、雪に埋まつた亮一が冬を見ると、いきなり冬も畠にジャンプした。

「あ～気持ちいい。私、雪つて大好き」冬は大きな声で叫んだ。

「都会では、大きな声も出せないわ。だから」雪と戯れる冬は、冬の妖精そのままだった。

「私、亮一さんが好き」冬が大声で叫んだ。亮一の周りの雪が一斉に溶けだした。そう感じるほど亮一は嬉しく、照れたのだ。冬は亮一に抱きついた。

「ねえ、結婚してくれる」亮一は信じられなかつた。その言葉の持つ意味が、どんなに重要で、どんなに責任があるかぐらには、亮一にも理解できていた。

「で、でも、僕は……」亮一の心配は病気だけだつた。

「何も言わずに、返事だけして」冬は亮一の言葉を遮つた。亮一はすぐには返事をしなかつたが、冬は急がせることも無く、じつと、亮一を見つめていた。亮一は考えた。もし、父のよつた運命ならば、冬を不幸するだろう。しかし、手術で元気になる可能性もあつたのだ。もちろん、手術で元気になれば、冬に結婚を申し込むつもりでいた。亮一はじつと見つめる冬を見た。断わることなど出来なかつた。

「僕でいいの」亮一はやつと声を発した。

「亮一さんがいいの」冬は戸惑いすら見せなかつた。

「でも、何で」

「結婚を誓つた人意外に、私の身体に触れてほしくない、から」亮一は真赤になる自分が分かつた。頬は焼けるように暑く、身体も熱い。耳たぶなどは溶け落ちそつた。

「行こう」冬は亮一の手を引き、畠からあぜ道に上がつた。冬はまるでこの街を知つているように歩きはじめた。冬の足どりは早かつた。亮一は冬に全てを任せた。ところが冬は、駅の灯りとは違うほうに歩き出した。亮一は戸惑つた。そして、この先の情景を思い出した。何もないはずだ。行けば行くほど街から離れ、小さな池にぶ

つかるはずだつた。その先は山に入る。冬はどこに行こうとしているのか、しかしその足どりは、田的地があるような歩き方だつた。

冬は無言で亮一の手を引いていた。そろそろ池に着きそうなとき、冬は亮一に振り返りかすかな笑みを浮かべた。

「ここ」冬が指差したのは、畑の納屋だ。普段は農機具が収められている納屋だつた。

「えつ、ここ? ここで何を」亮一の言葉はそこで止まつた。いかに馬鹿げた質問をしたのか気づいたからだ。しかし、冬は何も言わず手を引き、納屋の中に入つていつた。中は狭い。四人も入ればいっぱいになる。しかも多くの農機具がおかれたままなのだ。

「ちょっと待つて」冬が納屋の隅に行くと、小さな焚き火が現れた。どうやつて火をつけたのかは、分からなかつた。しかも炎に浮かび上がつた納屋の内部は、6畳ほどの広さに見えたのだ。暗くて分からなかつたのかも知れない。実際は、6畳の広さがあり、焚き火のスペースもあつたのだ。亮一はそう思つことにした。小さな焚き火の割には、寒さは全然感じなかつた。冬と二人でいることに、亮一は興奮と喜びを感じていたからかも知れなかつた。

「寒くない」向き合つ冬が優しく尋ねた。亮一が黙つて頷くと、冬は胸のボタンを外し始めた。

「冬・・」

「黙つて」冬は唇を人差し指でそつと触れた。

「でも、人が来たら」

「誰も来ないわ。ここは一人だけの場所なの」冬のブラウスが床に滑り落ち、真っ白な肌に、焚き火の炎が揺らめいた。冬は亮一を見つめたまま、ゆつくりとスカートのホックも外し、ジッパーを下ろした。スカートは音も無く下に落ちた。腿の産毛はキラキラと光り、白い下着もオレンジに染めていた。冬はその場に横たわつた。まるで藁のベッドがあるようだ。亮一も無言で服を脱いだ。パンツ一枚で冬に重なり、二人は激しく唇を求め合つた。冬は背中を浮かし、ブラのホックを外した。片手で胸を隠しつつ、冬はブラを取りはら

つた。ふくよかな胸はその形を崩すことなく、豊かな丸みを見せていた。冬は亮二に頷いて、腰を僅かに浮き上がらせた。亮二は冬のお腹に舌を這わせた。同時に冬の下着をゆっくり引き下げる、自分も裸のなつた。寒さはちつとも感じない。亮二はゆっくりとせり上がり、冬に身体を重ねた。一人の鼓動はぴったりと合っていた。亮二が静かに冬の中に入った。一人の影は納屋の壁に一つになつて映し出された。そして一人の影はゆらゆらと燃え上がった。

絆（前書き）

亮一に知りやれた、止むの恋と母の恋。

家の明かりは消えていた。母と弟は寝たようだ。冬を送り出してから、4時間も過ぎている。冬をホテルに送った後も、亮一は一人星を眺めていたのだ。しかし、用心深い母は玄関の鍵をかけずにしてくれた。弟の部屋からは、微かに音楽が流れていた。襖を開けて中を覗くと、弟は寝息を立てていた。音楽は首にかかったヘッドホンからもれていたのだ。亮一がいた頃は、この部屋で三人が寝起きを共にしていた。上の弟も就職が決まり、隣の県に引っ越した。会いたかつたが、仕事が忙しいらしい。コツクの仕事には、曜日は関係が無いのだ。隣の母の部屋は静かだった。亮一はそのまま部屋を通り越し、居間へと足を踏み入れた。母はまだ起きていたのだ。暗がりの中、一人亮一を待っていたらしい。

「かあさん」

「話があるんだろう。座つたら」亮一は胸が熱くなつた。

「実は・・・」言葉に詰まる亮一を、母はたしなめた。

「はつきり言いなさい。結婚の話じゃないんだから」母には分かっていたようだ。

「実は、俺、病気なんだ」その言葉に、母はつづみいた。テーブルに置かれた手が、小刻みに震えているのが、暗がりの中でもはつきりと見えた。やがて母は顔を上げ、小さな咳払いのあとに口を開いた。

「医者は、何て言つてる」

「早いうちに、手術を受けると・・・。俺、倒れたんだ」母は両手で顔を覆つた。

「心臓かい」母には、この日が来ることが分かつていたようだ。

「父さんと一緒になんだね」母は無言で頷いた。指の間から涙が溢れ出し、テーブルを濡らし始めた。肩は振るえ、小さな嗚咽がもれた。亮一は母の肩に手を置いた。その手を母はぎゅっと握り締め、作り

笑いで亮一を見つめた。涙を拭いて母は気丈に話し始めた。

「あれは、お前が3歳の時だつた。一向に泣き止まないお前を医者に見せたんだ。その時初めて知らされたのさ。心臓に疾患があるとね。しかも遺伝性だとも聞かされた。お父さんも、私も検査を受けたよ」

「父さんだつたんだね」亮一の言葉に、母は頷いた。

「でも、医者が言つには、まだ幼いお前に手術は勧めたくない。症状が悪化するとは言い切れない。と、治療をせずに様子を見るにしたんだ。ところが、医者が正しかったのかね、その後はすぐすぐと育ち、お前は元気に学校へ通い出した。覚えてるかい、2年の時に大きな病院に行つたろう」亮一は記憶を引っ張り出した。確かに何度も病院には行つていたが、何の検査か分からぬものも受けていた。

「覚えてる」

「医者は言つたよ。今の所問題はないってね。ただ、大人になつて、成長が止まつた時が心配だと」亮一ははつきりと思い出した。簡単な検査と言いながらも、医者の話に喜ぶ両親の姿が思い出されたのだ。

「そのあとは、本当にお前は元気に育つた。父さんも、母さんもそれだけで十分だつた。やがて父さんが倒れ、私は覚悟だけはしていたよ。もちろん、発病などしてほしくない。絶対にしないと思つていたよ」

「何故、父さんは治療を受けなかつたの」亮一は疑問を投げかけた。「当時は、そんな技術がなかつたのさ。それに、お前のことも気がかりだつた。父さんはいつも言つていたよ。俺より亮一を考える。俺の治療費は亮一のために取つておけと、何度もね」母は手の甲で涙を拭つた。亮一の目にも涙が溢れてきた。胸が苦しい。心が苦しいのだ。

「手術を受けるんだろ」

「そのつもり」亮一の気持ちは固まつた。父が自分の命をなげうつ

てまで、考えていてくれたのだ。その気持ちを粗末にすることは出来ないと、亮一は心から思つた。母は立ち上がり、箪笥の引き出しから、一通の通帳を亮一に手渡した。預金通帳だ。中を見ると、今でも欠かさず毎月入金されていた。その金額は、400万にも上つていたのだ。

「お前が、仕送り以外に送つたお金も入れてある。お前のお金だよ。遠慮せずに使いなさい」亮一は声を出して泣き出した。そんな亮一を母はしつかりと抱きしめた。

「必ず、必ずよくなると約束しどくれ。お前に何かあつたら、父さんに顔向けが出来ないからね」

「よくなるよ、必ずよくなる」亮一は力強く答えた。

「兄さん」弟も聞いていたらしい。亮一に飛び付き泣きじゃくつた。

「心配するな。よくなるからな」弟は、しきりに頷いた。

「兄ちゃんは、あの人と結婚するんだ。元気にならなくてはいけないんだ」亮一は自分自身にも、そう言い聞かせた。

「亮一、彼女は良い子だよ。冬さんのためにも元気におなり」母も、心から賛成したようだつた。

冬はその光景をじつと眺め、一粒の涙を残して姿を消した

## 不安（前書き）

亮一の故郷での楽しいひと時。しかし、初めて会った弟は、不安に顔をしかめるのだった。

翌朝は雪だつた。積もりそうな雪ではない。今年最後の雪だらう。母はそう言つていた。弟は学校に行くまで、亮一から離れなかつた。しかし、母も弟も病氣のことには、一切触れず他愛のない話に笑つていた。ただ、学校に行くときは、じつと亮一を見つめ小さく頷いてから飛び出して行つた。亮一は今日、帰るのだ。3・4日ゆっくりするつもりだつたが、冬がいる。3日もホテルに泊まらせるわけには行かなかつたのだ。かと言つて、亮一の家では落ち着かないだろうし、第一、布団を敷くスペースがないのだ。雑魚寝でよければ問題ないが、冬に雑魚寝はさせられなかつた。東京に戻る前に、上の弟も会つておきたかつた。母から詳しい場所を聞き、こつそり会いに行こうと決めていた。もちろん冬を連れてだ。亮一は最後に、母を抱きしめた。割ぱう着姿の母も亮一を抱きしめた。しかし、母は何も言わなかつた。母も仕事だ。一人は揃つて家を出た。母は漬物工場で働いている。そこで三人を育てたのだ。それこそ、亮一や上の弟がいるときは、掛け持ちで働き、家族の面倒を見てきた。その苦しい生活の中からでも、亮一のためにせつせと蓄えてしてくれたのだ。「絶対に元気になる」あらためて亮一は心に誓つた。

「おはよう」今日の冬は一段と美しく見えた。

「おはよう、亮一さん」はにかむ笑顔が、朝の日差しにも負けないほどに輝いていた。「この人は僕のものだ」亮一はあらためて思つた。昨夜のことは夢ではない。冬の態度がそう確信させた。亮一の手をぎゅっと握り、寄り添う髪からは、昨夜と同じ匂いが鼻をくすぐつた。

「今日の予定は」冬が聞いた。

「今日は帰るよ」

「そう・・・帰るのね」冬は寂しそうに答えた。

「でも、その前に、弟に会いに行きたい。冬も来てくれる」

「ええ、もちろん一緒に行くわ」冬は元気を取り戻したようだ。時間的には、ランチタイムの遅い時間に行きたかった。あまり忙しい時間では、顔も見れないのでは、と思ったのだ。その為に、時間つぶしが必要だつた。亮一の故郷には、これといった名物もない。しかし、有名ではないにしても、城跡があり、蕎麦は美味しかつた。まだ雪は止まないが、傘を差すほどでもない。二人は城跡に向かつて歩き出した。冬は東京にいるよりも、嬉しそうだつた。そう見えただけかも知れないが、昨夜のこともあり、亮一の心は幸せで一杯だつた。城跡と言つても、堀と石垣、小さな資料館があるだけだつたが、冬は心から楽しんでいるようだつた。資料館の展示物を見ては、亮一に質問し、屈託なく笑うのだ。この時期の観光は珍しい。それでも、珍しさ以上に冬は皆の視線を集めていった。ここでも冬は、注目の的だつた。ただ美しいだけではない。惹きつける何かを持つてゐるのだ。それが亮一には判らなかつた。亮一も惹きつけられた一人には違ひない。だが、それとは別の何かだ・・・。驚いたことに、冬は初めて蕎麦を食べたらしい。

「美味しい、美味しい」と喜んでいた。作る過程の実演でも、冬はじつと職人の手先を見ていた。可哀相なのは蕎麦職人だつた。冬に見つめられているせいか、所々でミスを犯した。生地を練る過程では生地を落とし、蕎麦生地を切るときには、とうとう自分の指まで切つてしまつたのだ。亮一は冬の手を取り、逃げ出した。亮一は笑つてゐる。冬には逃げる理由が解らない。不思議そうに亮一を見る冬も、亮一の笑いにつられ、笑い始めた。

「あの、蕎麦職人さ。すつごい緊張してたみたい」亮一も笑いながら答えた。

「そうなの、何で？」冬は気が付いていない。それが冬の良さであり、魅力の一つでもあつた。

「そろそろ、行こうか」亮一が言うと、冬は頷いた。隣県の最寄り駅までは1時間ぐらいだ。今から行けば、2時頃前には弟の店に着

く。「一度いい時間だつた。亮一の田舎よりもはるかに都会的な町だ。子供の頃には何度も来たが、すっかり近代的になり、駅も大きく綺麗になつていた。その新しい駅ビルの8階で弟は働いていた。洋食レストランのコックだ。予想通り、レストラン街は人影もまばらだつた。月曜の昼である。買い物客もまばらなのだろう。弟の店も空いていた。メニューを見て、冬は驚いていた。

「こんなに種類があるの」冬の店には数える程度のメニューだが、ここには前菜から始まり、飲み物に至るまで、多くのメニューが載せられていた。ランチメニューも豊富に揃い、6種類の中から選べる仕組みだつた。亮一も美味しく感じた。この中のどれかを弟が作つていると思うと、余計にそう感じたのかも知れない。ここでも冬は注目を集めていた。まばらな客も従業員も、冬の動きに注目を向けていた。冬も美味しいと食べていた。食事が終わり、亮一は従業員に弟のことを尋ねた。もうお客様はほとんどない。程なくして弟が現れた。コック服にコック帽、どこから見ても立派なコックだ。誰だろう、とそんな顔で現れた弟だが、亮一の顔を見た途端、大きな笑顔がこぼれた。

「兄貴」弟は亮一に抱きついた。うれしいと同時に大層驚いた様子だつた。

「どうしたの、いきなり。元気だつた。うれしいな」言葉は後から後から湧き出した。

「昨日は悪かった。仕事が遅番で。でも来てくれるなんて、本当にうれしいよ」弟とも三年振りだ。亮一も嬉しかつた。

「時間あつたら座れよ。紹介したい人もいるし」亮一の言葉で、弟は始めて冬を見た。その途端、弟は固まり動けなくなつた。冬は笑つて見ている。

「おい、どうした。座れよ」亮一の言葉で、弟は我に返つた。

「うん、もう暇だから、少しほは座れるよ」そう言つて亮一の隣りに腰をおろした。

「いらっしゃ、冬さん、婚約者だ」亮一はそう言いながら真赤になつた。

冬は笑つて手を差し出した。

「よろしくね」差し出された手を握り、弟はさらに硬直した。

「明です。よろしく」それが精一杯の答えだった。亮一は母が冬を氣に入つたことや、東京での生活などを明に話した。明もこの三年の出来事でなどを亮一に話した。その間も、明は何度も冬を見た。冬は一人の会話の邪魔はしなかつた。笑い、頷き、感心する。それ以外は会話に参加もしなかつた。一人の時間を無駄にはしたくなかったのだ。しかし、亮一は病氣のことは話さなかつた。折を見て母が話すと思ったからだ。余計な心配はさせたくないなかつたのだ。

「じゃあ、また来るよ。お前も機会があつたら、東京へ来いよ」二人は肩を叩きあい、そして明は仕事に戻つていつた。ただ最後に、亮一の氣になることを、一言残していつた。「本当に結婚するのか」である。もちろん冬には聞こえないようだ。亮一にはその意味が理解できなかつたが、「もちろんするよ」と答えた。「そうか」明は首を傾けそう答えた。顔には不安さえ窺えた。明の冬に対する反応は、母や下の弟とは違つていた。みんなは、釘付になるほど冬を見たのに反し、明は妙によそよそしかつた。人見知りな性格ではない。むしろ、下の弟よりも社交的だ。ところが、冬にはどこか他人行儀な振る舞いだつた。冬の美しさに圧倒されたのか、眩しくて見れなかつたのか、理由は解らないが、亮一はそれほど氣にも掛けなかつた。東京行きの切符を買うとき、冬がため息混じりに呟いた。

「亮一さんに田舎で待つてようかな」

「えつ」亮一は驚いた。冬は何を待つと言つのか、それが理解出来なかつた。病氣のことも手術を受けることも、冬にはまだ話してはいない。知つているはずはないのだ。

「ううん、なんでもないの」冬は氣を取り直して腕を絡めた。しかし、東京が近づくにつれ、冬は言葉を発しなくなつた。それどころか、元氣も失つていつた。

## 訪問者（前書き）

不安を覚えた弟からの意外な問いかけ。そして謎の訪問者。亮一は  
どうなるのか・・・。

渋谷駅に着く頃には、冬はとうとう熱を出した。熱い、熱いといいながらも、身体は冷たく冷え切っていた。かなり調子が悪そうに見えた。しかし冬は医者にも行かず、家に帰ると聞かなかつた。別れ際、冬は家の前で驚きの言葉を発した。およそ亮一が想像もしない言葉だつた。

「必ず、手術を受けてね。亮一さんは狙われているの」

「えつ、なんだつて。何で知つてるの？誰に狙われているの」

「心配しないで、手術を受ければ、狙われないわ。話はお母さんから聞いたのよ」母は亮一に黙つて話したようだ。しかし、『狙う』とはどういう意味かが解らなかつた。冬は亮一の制止も聞かずに、家に戻つてしまつた。どつちにしろ、冬はもう知つてしまつた。なるべく早く手術を受けて、元気になる必要に迫られた。亮一は2階の窓を見上げた。部屋の明かりは灯る素振りを見せなかつた。辺りはもう真つ暗だ。亮一は諦め、駅に向かつて歩き出した。携帯を取り出し、母に連絡を入れた。

「かあさん。昨日はありがとう。うん、今、送つたところ。そう、かあさん、冬に言つたの？」答えは違つた。弟も話してはいよいよだ。冬は誰から聞いたのか、不思議だつた。しかし、考えれば不思議な事ばかりだつた。亮一が田舎に行くことも知つていた。そして老婆に道行く人々。唯一、明だけは違つた。

明は何かに気が付いたように思えた。母との電話を切つたあと、そのまま明の番号をプッシュした。今日は早番だといつてた。案の定、2度のコールで明は電話に出た。

「今日は、ごちそさん」

「無事着いたんだね」毎に会つたが、その声は懐かしく感じた。

「ところで、明。お前の言葉が気になつてさー」亮一は挨拶のついでとも、言えそうな口ぶりだつた。

「冬さんはいるの？」冬には聞かせたくない話のようだ。

「もう、送り届けたよ」明は安心したように話始めた。

「結婚するのかい」帰り際の言葉と同じだ。

「そのつもりだけど、何故だ」

「冬さんは……」明は口元をもつた。どう言つていいか解らない様にも聞こえた。

「はつきり言えよ」亮一ははつきりと苛ついた。明は亮一の結婚を喜んではいないのだ。祝福してもらいたい出来事なのに、一番仲の良い弟が意味不明なことを言つ。つい言葉が荒れた。

「冬さんは人間かい」その答えに、亮一は笑いそうになつた。突飛過ぎたのだ。

「馬鹿なこと言つな。兄ちゃんは冬さんと……」亮一は納屋での出来事を思い出したが、そんなことは言えない。冬の手前もある上、恥ずかしさもあつたのだ。

「どうした？」明は次の言葉を待つていた。

「冬さんは、キスもしたんだ」どうにか考えついた答えだつた。

「人間に決まつてるだろう」

「それならばいいけど……。ちょっとと気になつたんだ。影が、いや、身体全部が薄く見えたんだ」亮一は正直驚いた。明は靈感が強い。今では知らないが、子供の頃は強かつた。幽霊とかを見るわけではなく、死の迫つた人が分かつたのだ。元気だつた叔父の突然の死も、明には事前に分かつっていた。

「叔父さん、具合が悪いの」楽しく大声で笑う叔父に、当時5歳の明が話しかけた。その場のみんなは驚いたが、叔父は頭を撫ぜながら、明に言つた。

「大丈夫だよ。ありがとうね」その3日後、その叔父は他界した。突然の心臓発作にみまわれたためだつたが、誰一人想像すらしないことだつた。明を除いては……。その明が言つのだ。一概に嘘と決め付けるわけにはいかない。だが、気のせいとしか思えなかつた。冬の温もりを感じ、冬の全てを知つた今、亮一には明の言葉を否定

するしかなかつた。

「心配してくれるのは嬉しいけど、大丈夫だ。安心しろ」亮一は言い放つた。

「そうか、なら、いいけど。兄貴には幸せになつてほしいからな」兄貴思いのいい弟だつた。明には分かつてゐたのだ。亮一が高卒で遠くに就職した理由を。だから明も兄貴に見習い、高卒で働きに出たのだ。母は病氣のことはまだ言つてないようだつた。またの再会を誓つて亮一は電話を切つた。明との再会の為、親父の意志の為、かあさんとの約束の為、何より冬との為に早く手術を受け、元気になる必要があつた。金はある。両親が亮一の為にこしらえてくれたお金だ。明日は病院に行こうと心に決めた。

その夜亮一は重苦しい雰囲氣で、目を覚ました。明日にでも春が来そうなこの時期に、寒さで目が覚め

得体の知れない重圧を受けたのだ。部屋はいつもと変わらない。だが、どこかがおかしい。部屋全体がうごめいているようだ。天井のどこかで音がする。何かが弾けるような音だ。カーテンも揺らめいている。隙間風では無さそうだ。不意にテーブルのカップが下に落ちた。就寝前に飲んだ紅茶のカップが、急に倒れ床に落ちたのだ。レコードのぎつしり詰まつた本棚が、ぎしぎしと揺れだした。天井の常夜灯もチカチカと点滅を始めた。亮一は恐ろしさに身を固めた。普通ではない。地震でもない。その証拠に、寝床自体は揺れていないのだ。突然カーテンが大きく揺れ、黒い霧が現れた。その霧は徐々に密度を増して、人の形に変化した。亮一は何も言えずに凝視した。動きたくても動けなかつたのだ。その影はゆらゆらと浮いていた。明らかに人間と思えるが、その顔は見えない。ただ、瞳だけが不気味に光つていた。

「お前は、死ぬ運命だ」その影が喋つた。實際には喋つてはいない。亮一の頭に話しかけたのだ。

「その金を使うのか？その金で、母と弟たちは楽になれるものを・」亮一ははつとなつた。確かに自分の事しか考えていなかつた。

「お前の親父は、自分の命と引き換えた。お前は弟を見捨てるのか？」さらりとその影は驚きの言葉を発した。

「弟も、同じだ」病気は遺伝性。確かにそう言っていた。自分だけではない？弟も？亮一はそのことまで考えなかつたのだ。弟たちも同じ血を引いている。可能性はあるのだ。

「それじゃ、弟も？」亮一はやつと声を出した。得体の知れない影だが、不思議と恐ろしさは消えていた。それよりも、これから弟に降りかかる災難を心配したのだ。

「下の弟。三年後だ」影はそれだけを答えた。亮一は自分の身勝手に落胆した。もしも、この金を使つてしまつたら、弟はどうなるのだろう。亮一は頭を抱えた。その時、不気味な影が怯んだ。亮一の隣りに光り輝く物体が現れたのだ。その光の真ん中には、冬がいた。白い衣をまとつた冬がいたのだ。冬は黒い影と対峙し、激しく言い放つた。

「消えなさい！」己の居場所に戻るのです」影も負けではないなかつた。「邪魔をするな。こいつは俺のものだ」亮一は訳が判らなかつた。光の冬は確かに冬だ。その声も冬の声だ。しかしそこにいる冬は宙に浮き、突然、部屋に現れたのだ。

「冬・・・」亮一は思わず呟いた。光の冬は優しく亮一を見つめ静かに答えた。

「私は冬ではありません。これの言つことは全て嘘。惑わされてもいいません。一人の弟は心配ないですよ」笑顔も冬そのものだつた。いきなり黒い影が、光の冬に突進した。ところが黒い影は、輝く光に弾き飛ばされ、カーテンの隙間から消えていつた。

「いいですね。あれの言つた事は忘れなさい。嘘で騙すのがあれの手口。惑わされないように」そして光の冬も消滅した。亮一は目を疑つた。今、ここで起きたことは、事実としか思えなかつた。光の冬は誰なのか、黒い影は何者なのか？亮一の理解をはるかに超える出来事だった。

## 涙と笑い（前書き）

母と弟。亡き父の愛に包まれ、亮一は決心した・・。

一睡も出来ずに朝を迎えた。不思議な体験のあと、亮一はぼつと起きていた。起きていれば、夢だったとは言えないと思ったのだ。こうして今考へても、あの出来事は事実に相違なかつた。落ちたカップはそのまま、レコードも何枚かは床に散らばつていたのだ。話から察すると、黒い影は死神であろう。そして光の冬は神? そうだ、冬が気がかりだ。亮一は慌てて冬の店に電話を掛けた。呼び出し音は聞こえるが、出る気配はなかつた。冬もかなり具合が悪そうだった。病院でも行つたかなと考え、亮一も病院行きを思い出した。急いで用意をして、亮一は家を出た。

長い時間を検査に費やした。夕方近くになつて、よつやく医者の所見が聞かされた。

「言いにくいですが、急いだほうが良さそうです。難しい手術で5割でしょ?」亮一が家族は来れないと医者に伝えると、医者は亮一に真実を話した。亮一は落ち着き、恐怖も戸惑いも見せなかつたからだ。5割の意味も、亮一にはしっかりと伝わつたが、亮一は少しもつろたえなかつた。光の冬が付いている。そう思つたのだ。手術は三日後に決まつた。それほど緊急を要したらしく、スケジュールの調整で、やつと決まつたのだ。亮一は母に連絡を入れた。母は前日の昼には来ると言つていた。そして課長。課長も当日に顔を出してくれるようだ。後は冬。冬には会つて伝えたかつた。しかし冬とは連絡が付かなかつた。翌日店にも出かけたが、シャッターが降りたまま、外から呼んでも出てこなかつた。中の様子を窺つたが、人の気配も感じられなかつた。亮一は焦つた。このまま会えなくなるのでは。そう思つたのだ。その翌日も、冬とは連絡が取れなかつた。今日は亮一の母が来る。仕方無しに亮一は母を迎えて行つた。

「あたしからも、連絡入れるよ。それより、お前は、明日のことだけ考へてなさい」母の言葉はきつかった。それほど心配しているの

は亮一にも理解できた。今は手術に専念しよう。亮一はそう思った。今まで冬は、何も言わなくても、分かつてくれていたのだ。今回もキット・・・。そんな期待に亮一は賭けた。

「案外綺麗にしてるんだね」亮一の部屋に、母が来るのは初めてだつた。

「お前は、昔からしつかりしてたからね。心配はしてなかつたけど。まさか、冬せんに掃除させてはいらないだろうね」

「大丈夫だよ。まだ、ここには来た事ないから」光の冬が、冬でなければ亮一の答えは正しかつた。

「そうかい。美味しいものでも作るかね」母は腕まくりをしながら、台所に向かつた。

「かあさん、ごめん。食事制限で食べられないよ」手術の注意書きに、前日の夕食は抜くように書かれていたのだ。亮一はおとなしく書面の注意に従つた。

「遠慮しないで、かあさんは食べて」亮一の優しい言葉が、母の胸を締め付けた。

「そうかい、じゃあ、簡単に済ますかね」そう言いながら、突然、母は台所で泣き崩れた。

「じめんよ。亮一。父さんを許しておくれ」

「何言つてるの、かあさん。父さんにも、かあさんにも感謝しているよ。冬にも会えたんだ。生んでくれたお陰だと思つてるんだ」亮一は駆け寄り母を抱きしめた。母は何度も亮一に謝つていた。気丈夫な母のこんな姿を、亮一は初めて目の当たりにした。亮一の頬にも涙が伝わつたが、亮一は必死に堪えた。その夜は、久しぶりに一人だけの時間を過ごせ、思い出話に花が咲き、遅くまで語り合つていた。

翌朝、バッグに荷物を詰めていたとき、ドアが激しくノックされた。弟の明だつた。

「もう、この前言つてくれれば、昨日から休めたのに」開口一番、明はまくし立てた。

「「めんよ、まだ決まってなかつたから」「亮」は答えた。  
「でも、心配はしてないよ。兄貴を信じているから」「亮」は明に抱きついた。

「お前らしいよ。でも、お前の言葉を、俺も信じる」「亮」は、笑つた。みんなも笑つた。誰一人、残り五割のことなど、考へてはいなかつた。部屋を出ようとした時に、課長もやつてきた。

「ふう間に合つた。車を借りてきたからな」課長はわざわざ、会社のワゴンを借りてきてくれたのだ。母は丁寧に挨拶を交わし、課長も恐縮していた。あとは冬がいてくれれば……。

## 理由（前書き）

残り2話。 次々と判明する理由。 驚く亮一は・・・。

具合が悪くもないのに、病院のベッドに寝かされるのは、どことなく照れくさかった。亮一はそう思つたが、身体の中では、確實に死への秒読みが始まつていたのだ。母と弟、課長がまわりにあつまつてゐる。だが、病氣の話は一切話題には上らない。皆、氣を使つてゐるが、亮一にも伝わつた。看護士が体温を測り、注意事項を母に伝えた。時間は刻々と迫つてくる。冬は来ない。時たま母が電話を掛けに行くが、首を振り振り戻つてくるのだ。和やかに見える雰囲気も、看護士の一言で終わりを告げた。

「そろそろ、準備します。廊下でお待ちください」母は、名残惜しそうに亮一を見つめた。カーテンが引かれ、看護士が着替えを亮一に渡した。頭もキャップをかぶせられ、亮一も幾らか緊張し始めた。

「大丈夫、心配しないで」

「ありが・・・・・」冬だった。看護士制服を着ているが、その顔は冬に間違いなかつた。亮一は驚きで声を失つた。自然と目から涙がこぼれた。会いたかつた冬、その冬が目の前にいる。

「冬・・・・」亮一は声にならないほど小さく呟いた。

「私は冬ではないの。でも、彼女はよく知つてゐるわ」身体はせつせと仕事をしてゐるが、顔だけは亮一に向かい、優しく答えた。

「でも・・・」亮一が手を握つた瞬間、冬の顔は先ほどの看護士へと戻つていた。

「大丈夫ですよ」看護士は優しく亮一の手をはらつた。亮一の涙が、看護士の気持ちも変えたようだつた。可哀想にと、その表情が語つていた。準備が終わると、もう一人の看護士が、ストレッチャーを運んできた。テレビとかではよく見る、キヤスター付きのベッドだが、それに乗るとは、亮一も思いもしなかつた。カラカラという音と共に、天井の蛍光灯が頭上を移動する。エレベータに乗せられたが、上か下かも見当がつかない。母は亮一の顔を覗き込み、ぎゅつ

と手を握った。多くの扉を抜けたあと、証明の沢山ある部屋に辿り着いた。手術台に移動させられ、医師が亮一に話しかけた。

「これから行いますが、全身麻酔です。気がついたら終わつていますよ。緊張せずに任せてください」マスクで顔は見えないが、声から笑顔が想像できた。その間も、点滴の注射が打たれ、脈拍、血圧、体温などの測定装置が、亮一の身体に取りつけられていった。

「では、麻酔をかけます。10から逆に数えてください」10、9、

8・・・亮一は電車に乗つていた。

あの電車だ。古めかしい電車だが、故郷の電車。そして学生とおばあさん。その学生が亮一を見た。あの時と同じ父だった。父は笑いながら亮一に近づいた。

「良かった。手術を受けてくれて」学生の父が言った。その時おばあさんも立ち上がり、亮一に近づいた。しかしその人はおばあさんではなく、冬だった。いや、光の冬だった。

「私たちは、貴方を見守つっていました。貴方の運命も決まつていました」光の冬が話した。

「どういうことですか」

「本当ならば、まだまだ、先のある貴方の寿命を、貴方は自ら捨ててしまうのです」

「なぜ」亮一は理由が判らなかつた。

「貴方も見たでしよう。黒い霧を。思つたように死神です。貴方は死神に憑かれ、手術を拒否するのです。弟のことを思つて」亮一は思い出した。死神が言つた言葉を。死神は、弟も同じだと言つていたのだ。おそらくその時に光の冬が現れなかつたら、その言葉を信じ、手術は受けなかつたかも知れない。しかし、亮一には冬がいる。手術も受けたかも知れない。その時、光の冬が言つた。

「彼女は私の娘です。もちろん私たち同様に、貴方を守つていたのです」亮一はその時全てを悟つた。冬が亮一の前に現れたことも、皆が冬に注目したことも、老婆が揃んでいたのは、それが見えたからだつたのだ。学生の父が亮一の肩を抱き、静かに言つた。

「お前には苦労をかけた。すまない。でも、これからは幸せになつてくれ」亮一も父に抱きついた。そして光の冬に尋ねた。

「じゃあ、もう冬には会えないんですね」

「あの子の仕事は終わりました。春の訪れと共に。あの日貴方が送つた日が最後です」亮一の目から涙がこぼれた。手術台の亮一も涙を流していた。手術は4時間で終了した。亮一は麻酔で眠つたまま、病室の戻ってきた。手術の成功をきき、母も弟も安堵の表情を浮かべ、医師に感謝の言葉を何度も言つていた

永久に（前書き）

最終回。

病室に戻つて5時間後、亮一は目を覚ました。身体はだるい。胸には引っ張られる感じが残つている。

麻酔がまだ効いているのか、痛みはない。心拍数を示す機械が、規則正しく波を打つていた。腕には何本もの点滴がつながつていた。喉が渴いた。亮一は少し頭を浮かせ、周囲を見回した。母と弟の明は、椅子に座り睡つていた。母の手は亮一の手を握つていた。亮一は母の手をぎゅっと握り、小さくゆすつた。

「うん、あ、気がついたね」母は目を覚まし、亮一の頭を撫ぜた。  
「うん、ちょっと喉が渴いた」母は亮一に白湯を飲ませた。飲み込むたびに胸が引きつった。

「痛いのかい」顔をしかめる亮一に、母が尋ねた。

「ううん、突つ張るだけ。痛みはないよ」二人の会話で、明も目を覚ました。

「お帰り」明の顔は笑つていた。

「二人とも聞いて。父さんに会つたよ」亮一は手術中に見た現実とも思える夢や、今までの出来事を一人に話した。母は声を出して泣き出した。明も目頭を押さえている。

「ずっと見守つてくれていたんだね」亮一は父の気持ちが嬉しかつた。自分の治療費を亮一の為にと残しただけでなく、ずっと考えてくれていたのだ。冬のことはもちろんショックだ。しかし、それも父の愛によるものだと思うと、不思議と心は癒された。

翌日の朝に明は帰つていった。仕事があるようだ。次の休みも顔を出すと言つていた。母はゆっくり出来るらしい。とりあえずは亮一のアパートにとまることにしたようだ。朝に来ては夜に帰る。そんな日々が一週間ほどした時に、亮一は母に言つた。

「もう大丈夫だよ。痛みもないし、あいつが心配だ」亮一は下の弟のことが気がかりだつた。

「そうだね、いつまでも面倒見てもらうわけには行かないし・・・。一度帰るとするかね」弟は、友達の家で世話になっていた。弟は、心配をよそに楽しんでいた。母もその2日後に家に戻つていった。医者の話では、術後の経過もよく、あと2週間で退院出来るそうだ。退院も近づき、抜糸が終わった日の夜だつた。看護士が亮一の体温を測りに来たときに、うれしい出来事が起きた。

「いかかですか。もうすぐ退院ですね」亮一が返事をしようとした時、光の冬が現れた。

「まだその気ならば、退院してから行きなさい」

「えつ」亮一がその声に気がついた時には、既にいつもの看護士に戻つていた。しかし亮一には、その意味がはつきりと理解できたのだ。亮一は退院が待ちどうしかつた。もう一度冬に会える。そう信じていたのだ。亮一は歩行練習も始めた。足は完全になまくらになつていた。一步が辛い。しかし、家に帰れば一人だ。亮一は一生懸命に歩き続けた。退院の日には、かなり回復していたが、安全の為に杖が渡された。母も退院に合わせて上京してきて、課長も車を出してくれた。

「無事に退院できて良かった」母も課長も喜んでくれた。明は仕事の都合でこれないらしいが、休みのたびに病院に来てくれ、空白の3年を埋めるには十分だつた。課長は仕事の話もしないで、送るとすぐに会社に戻つていつた。水入らずを邪魔しないよう、気を使つてくれたのだ。部屋は綺麗に片付いていた。母のお陰だ。母は暫く実家に来ないかと誘つてくれた。母の気持ちは嬉しかつたが、亮一にはやらなければならぬことがあつた。冬の店に行くことだ。

2日後、母は残念そうに家に戻つた。亮一の足は、以前のように回復していた。胸の痛さもない。生まれ変わつたように、気分は良かつた。明日は冬に会いに行く。そう決めた途端、亮一の心も生まれ変わつた。

春の日差しは優しく亮一を包み込んだ。ポカポカと暖かい。亮一は電車内で眠りそうになつたが、寝る間もなく渋谷に着いた。人々

の服も薄着になり、春の陽気を堪能していた。僅か2ヶ月程度の間だが、久しぶりの坂道は懐かしく、こんなにも急坂だつのか、と亮二を驚かせた。坂の途中には、新しい店も出来ていた。以前は空き店舗だつたが、小さな花屋が出来ていた。亮二はその店に入つた。狭い店だが多くの花に埋もれていた。亮二は奮発して大きな花束を作つてもらつた。見慣れたわき道。亮二の足は自然と速くなつた。道を曲がると駐車場。そして数件の民家。そして冬の店・・・・。ない。冬の店がない。冬の店があつたところには。何の変哲もない家があるだけで、店と呼べる面影はなかつた。亮二は慌てて周囲を見回した。かつて亮二が冬の部屋を見上げた場所に、間違いはない。冬の店は、冬はどこに行つたのか、亮二は途方にくれた。亮二は当然なく彷徨つた。その周辺を歩き回つたのだ。しかし結局は冬の店は見つからなかつた。光の冬は言つていた。冬は娘だと。それが事実ならば、冬の店は光の冬が料理を作つていたことになる。光の冬が人間以外、神の使いと考えれば、突然に店がなくなつても不思議ではなかつた。ほかにお客がいなかつたのも、亮二にしか見えなかつたと仮定すれば、つじつまが合う。亮二は一冬の間、現実と夢の間に身を置いていたのだ。しかし光の冬は確かに言つた。「その気ならば行きなさい」と。

亮二花束を捨てた。どこに行けばいいのか見当も付かなかつたのだ。アパートに戻り、亮二は泣いた。声に出して泣き続けた。翌日、会社に顔を出し、暫く実家に戻ると伝えた。課長は一言、待つてゐぞと、亮二の肩を叩いた。亮二は揺られる電車の中でも、冬のことを考えた。どうしても諦め切れなかつたのだ。しかし、思惑とは裏腹に、冬の居場所はわからなかつた。母は暖かく迎えてくれた。美味しいものを作るんだけど、張り切つて台所に立つたが、肩が震えるのを亮二は見逃さなかつた。亮二は散歩に出た。母の姿を見ていらなかつたのだ。雪はまだ残つてゐる。ふと見ると、畑に大きな穴が開いていた。人が転んだような穴が、まだ残雪に残つていたのだ。亮二は思い出だした。冬とふざけ畑に転がつたこと、冬が結婚のこ

とを言い出したこと、つい昨日のような気がした。その時亮一ははつとした。二人が結ばれた納屋のことを。亮一は、走った。心臓の鼓動は激しくなる。息も苦しい。それでも亮一は走り続けた。この程度で負けるものかと・・・。納屋は、確かにそこにあった。夕日の中に浮かぶ納屋は、とても6畳の広さがあるとは見えなかつた。あの出来事も、夢と現実の隙間だつたのだろうか。亮一は納屋の扉を開いた。農機具が収まつた狭い空間には、冬の姿はなかつた。息が切れた。亮一はその場に座り込み、胸を押さえた。そんな亮一の耳に、雪を踏む音が聞こえた。

「花束、もつたいたいなかつたね」振り向くと冬が立つていた。

「冬、本当に冬だね」亮一は立ち上がつた。冬は亮一を見つめ、黙つて頷いた。

「冬」亮一は思いつき冬を抱きしめた。冬の温もり冬の匂い。全てが冬のものだつた。

「会いたかった」冬も亮一に抱きついた。

「でも、なんで？」

「貴方の気持ちが私を引き止めたの。もう、何の力もないただの人間。それでもいい？」亮一は何度も頷いた。たとえ幽霊でもいいと思つていたのだ。答えは言つまでもなかつた。

「私の母から、1つだけ言付けがあるの。一人の子供に、遺伝は残らない。つて」亮一は冬を抱え、踊りだした。僅かに冬は重たく感じた。おそらく、魂がしつかりと根付いたからだろう。亮一はそう思つた。

## 永久に（後書き）

最期まで読んでいただきありがとうございました。書きながらも思つたのですが、近頃は、親族の愛が薄くなつたように感じます。子供を殺したり、親を殺したりと、悲しい事件が続いています。恋愛と言いながら、家族の愛に重点を置きすぎたように思います、ご了承いただきたく思います。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3078d/>

---

女神

2010年10月8日14時59分発行